

ノ國民派ハ歐洲諸國ノ例ニ從ヒ、海陸ノ軍備ヲ充實センコトヲ其政府ニ勸告セリト。是即チ露國トノ爭鬪ニ百般ノ準備ヲ爲スニ外ナラズ。言語ヨリ實際ニ移ルニハ多少ノ時日ヲ要スベシト雖ドモ、日本ガ夙ニ其長眠ヲ攪破シ、開明ノ途ニ就キ、既ニ軍事の進歩ヲ表ハシタルハ吾輩ガ眼前ニ目撃シタルノ事實ナリ。將來日本ノ攻撃的準備ニ對シ、周到ナル注意ヲ加フルハ最モ緊要ナリ。清帝國ノ南部ハ日本ガ特別ナル希望ヲ有セザルトコロナリト見エ、日本某新聞記者ノ言ニ「四千萬ノ眼眸ハ總テ北方ヲ睨視ス」ト、是レ朝鮮及滿洲ヲ指示スルモノト豫定セザルヲ得ザルモノナリ」云々ト論結セリ。

「ビルジエウイカ、ウエドモスチ」(銀行新聞)ハ六月十八日ノ紙上ニ於テ「露國政府ノ擔保ニ係ル清國外債募集ニ對スル談判ノ重心ハ、目下「ペテルブルグ」ニ在リ。當府萬國商業銀行頭取「ロトシテイン」氏ハ、巴里ニ赴キ百般ノ困難ヲ排除シテ巧ミニ佛國ノ銀行家一派ト談合シ、獨國銀行社會ノ反對ヲ鎮制シ、全ク其要領ヲ得テ昨日當府ニ歸着セラレタリ。又吾輩ノ傳聞スル所ニ據レバ、佛國ノ本債發行組合員、即チ巴里和蘭銀行頭取「ネツリン」氏「クレジ、リオネ」銀行員プリス氏及銀行家「ホツチンゲル」氏等ハ、最後ノ條約調印ノ爲メ明日當府ニ來着スベシト、此四朱利付公債發行ノ組合ハ、當府中ノ重ナル四銀行及巴里ノ重ナル五銀行、即チ巴里和蘭銀行「コムプトアル、ナシヨナル、デ、エスコムト」「クレジ、リオネ」「ソシエテ、ジエネラル」及「クレヂ、アン

ドストリエル」ヨリ成立シ其發行總額ハ四億「フランク」ニシテ、露佛蘭ノ三市場ニ於テ募集スルモノトス。

普獨兩國新聞ノ通信ニハ常ニ傳來的誤謬アルハ今日ニ始リタル事迹ニ非ラズト雖ドモ、之ヲ正誤スルコトモ亦タ必要ナリ。即チ「露政府ハ年利四朱ノ公債ヲ擔保シテ清國ヨリハ五朱ノ年利ヲ徵收ス」ト誣ヒ如此キ行爲ハ多分普國ガ充分ニ信用ヲ措カザル邦國ニ恩義ヲ布カントスルノ時ニ於テ見ルヲ得ベキモ、露國ハ決シテ如此キ射利的ノ事業ヲ企テ、大國ノ威望ヲ損スルガ如キ念慮ハ寸毫ダモ之ヲ抱持セズ。只ダ交誼アル隣邦ノ解體ヲ見ルニ忍ビズ、之ヲ扶養セント欲スル而已。此寬大ナル露國ノ所置ハ必ラズヤ絶東ニ於ケル情勢ニ大ナル影響ヲ及ボスベシト確信スルガ故ニ假令ハ外國諸新聞ガ我大藏大臣ヲ處措ヲ以テ、普國「ビーコンスフヒールド」侯ガ埃及前副王「イスマイルバシヤ」ヨリ無配當ノ「スエス」溝渠株ヲ買占メルタメノ事迹ト同一視スルモ、吾輩ハ決シテ一驚ヲ喫セザルナリ」ト論ゼリ。

「グラジダニン」ハ六月十八日ノ紙上ニ於テ朝鮮問題ヲ論ジテ曰ク、進取ノ氣風ハ露國ヲシテ如何ナル點ニ迄達セシメントスル歟。或ハ土京ヲ恐赫シ或ハ「ペルシヤ」灣岸ニ突出セントシ或ハ印度ニ侵入セントシ、今ヤ此氣運ハ延ビテ絶東ノ朝鮮ニ波及セリ。露國ハ素ヨリ此氣風ニ倚賴シ、坤輿上六分ノ一強ノ地面ヲ領シ、外敵ノ來襲ヲ意トセズ。國民安堵シテ内治ノ整頓ニ從事スルコトヲ得



ル迄ニ其國威ヲ發揚セリ。故ニ露國ハ最早其領土ヲ擴張スルノ必要アルヲ見ズ。土國トノ最後戰爭ハ全ク西歐ノ敵國ガ露國自然ノ發達ヲ防グントスル陰謀ニ由リ釀成セラレタルモノニシテ、露國ハ獨リ其目的ヲ達シ得ザリシ而已ナラズ、戰後財政上ニ非常ノ困難ヲ感ジ、漸ク近年ニ及デ瘡痕ヲ全治シ得タルノミ。爾後引繼ギ最近十四年間、敵國ハ頻リニ露國ヲシテ戰端ヲ開カシメント試ミタレドモ、幸先帝ノ平和手段ニ由リ、纔カニ禍難ヲ免カルルコトヲ得タリ。然ルニ今日絶東ニ於テ敵國ガ再溶シタル陰謀ニ陥リ、平和ヲ破ブルガ如キハ、露國ニ取り最モ不得策ナルベク、寧ロ外敵來襲ニ依リテ暫ク進取的運動ヲナサザルノ勝レルニ如カズ。露國人民ハ今日迄既ニ軍事上ニ於テ功績ヲ顯ハシ、名譽ヲ博シタルハ明瞭ナル事實ニシテ、今日ハ何レノ國カ敢テ來襲スルモノアラシヤ。瑞典ハ其舊領土ヲ恢復スルニ足ルノ國力ニ乏シク、獨國ハ常ニ我國ト親睦セントスルノ意向ヲ有シ、戰爭ハ相互ノ不利益ナルコトヲ確認セリ。土國ニ至テモ露國ハ只ダ之ト義戰ヲ爲シタル而已ニ過ギズ。好シ土人ヲ其首都ヨリ放逐シ得ルモ、之ニ代ハルモノハ善人ナレバ、露國ハ復タ何等ノ利益ダモ收得スルコト能ハザルベシ。寧ロ土國ト和睦シテ露國軍艦ノ爲メ「ボスホラス」海門ヲ開カシメ、却テ他國ノ爲メ之ヲ封鎖スルノ手段ヲ執ルニ若カズ。波斯トハ多年親厚ナル交誼ヲ有シ普國ガ曾テ砲艦ヲ裏海ニ浮マシムルコトヲ同盟政府ニ勸告セシコトヲモ、同國ハ之ヲ拒絶セリ。故ニ露國ハ特別ナル必要ナクシテ同國ノ領土ヲ併領スルノ理由ヲ有セザルナリ。

今ヤ試ミニ眼ヲ絶東ニ轉ゼン。清國及日本ハ素ト露國ノ爲メ恐ルベキノ邦國ニアラズ。露國傳來ノ政策ニ基クモ常ニ之ト隣好ヲ保持セザルベカラズ。況ンヤ必要ヲ見ズシテ日清韓ノ版圖ニ囑望スルニ於テオヤ（以下露國ト絶東トノ間ニ於ケル貿易ノ微々タル情況ヲ叙述スルノ一段略之）抑モ露國ガ日清ノ葛藤ニ干涉スルハ如何ナル理由アルニ基クモノナルカ。日本ガ朝鮮若クハ滿洲ノ一部ヲ占領シタリトテ、果シテ如何ナル危険カアル。日本ハ夙ニ半開國ノ社團ヲ穎脱シ、開明ノ程度上多クノ關係ニ於テ歐洲諸國ト争フコトヲ得ベシト説起シ、千八百二十年日本ノ囚虜トナリタル「ゴロウニン」氏ノ紀行中日本ヲ讚揚スルノ諸點ヲ精細ニ記述シ、日本ノ長處ノミヲ列舉シ大イニ之ヲ庇護シタル後「日本ト清國トノ争闘ハ今日肇始シタルモノニアラズ。過般ノ戰爭モ亦或ヒハ最後ノ戰爭ナラザルベシ。日清相互ノ敵視ハ寧ロ遺傳ニ出デ、恰モ歐洲ニ於ケル佛獨兩國ノ關係ト一般ナレバ、日清同盟杯ト唱道スレドモ是深ク憂フルニ足ルザルナリ。朝鮮ハ既ニ十七世紀ニ於テ日本ニ征服セラレ、其所屬トナリ、之ニ年貢ヲ拂ヒシト同時ニ、清國ニ對シテモ亦タ年貢ヲ納メ、藩屬ノ實ヲ示セリ。如此キ關係ハ到底兩國ノ葛藤ヲシテ避クベカラザルノモノタラシメタリ。故ニ今日ノ日本ガ戰捷ヲ博シ朝鮮ノ前途ニ關シ、百方努力スルハ是レ自然ノ情勢ニシテ朝鮮ガ日本保護ノ下ニ立ツハ日清兩國間ニ存在スル關係上已ムヲ得ザルノ結果ナリ。然レドモ若シ日本ガ朝鮮ヲ自國ノ攻撃的根據地ニ變ジ、朝鮮以北ノ地ヲ蠶食セント試マバ、露國ハ素ヨリ之ニ抵抗スベシト雖ドモ、論



理上ヨリ云フモ日本ノ平和主義上ヨリ見ルモ、今日如此キ意思アリトスルハ全ク譏誣タルヲ免カレズ。現今露國ノ急務ハ絶東ニ於テ氷結セザル港灣ヲ有スルニ在リ。是レ素ヨリ露國ノ爲メ必要ナルハ論ヲ俟タズト雖ドモ、手ニ干戈ヲ弄シ、他國ノ境土ヲ侵掠スルニ先チ、最初ニ自國ノ版圖中ニ在ル港灣ノ改良ヨリ着手セザルベカラズ。現ニ「ムールマン」地方ニハ終年氷結セ港灣アルガ故ニ之ヲ「フヒンランド」鐵道線ト聯絡セシムルニ於テ、誰カ故障ヲ唱フルモノアラシヤ。且ツ現存ノ港灣浦潮ノ如キ、未ダ幾多ノ改良ヲ爲スベキ必要アルニ非ズヤ。

今日ハ露國ガ版圖ノ擴張ヲ企ツルノ時期ニ非ラズ。宜シク内治ノ整頓ヲ謀ルベキノ時期ナリ。露人ノ才能ト熱心ハ決シテ獨人及日本人ニ讓ラズ。唯ダ開明ノ點ニ於テ他ノ諸國ニ劣ルモノアルハ是レ露國ガ進取スルコトノミヲ知リテ、適時ニ必要ナル事業ヲ完成セザルニ原因スト云ハザルヲ得ズ。今ヤ露國內到ル處ニ人材缺乏ノ歎聲ヲ聽カザルハナシ。故ニ國家ニ必要ナル人材ヲ養成スルハ實ニ露國目下ノ急務ナリ云々

明治廿八年六月廿一日

## 媾和條約案 (甲)

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ、兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ、且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ、媾條約ヲ訂結スル爲メニ、大日本國皇帝陛下ハ……………ヲ大清國皇帝陛下ハ……………ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ。因テ各全權大臣ハ互ニ其委任狀ヲ示シ、其良好妥當ナルヲ認め、以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ。

### 第一條

清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自由ノ國タルコトヲ確認ス。因テ右獨立自主ヲ損害スベキ朝鮮國ヨリ清國へ對スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スベシ。

### 第二條

清國ハ左記ノ土地ノ主權、竝ニ該地ニ在ル保壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。  
一、左ノ經界内ニ在ル盛京省南部ノ地。

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ三叉子ニ至リ、三叉子ヨリ北ノ方榆樹底下ニ亘リテ直線ヲ畫シ、榆樹底下ヨリ正西ニ向テ直線ヲ畫シテ遼河ニ達シ、右直線ト遼河トノ交會點ヨリ該河流ニ沿フテ



下リ、北緯四十一度ノ線ニ達シ、遼河上北緯四十一度ノ點ヨリ同緯度ニ沿フテ東經百二十二度ノ線ニ達シ。北緯四十一度東經百二十二度ノ點ヨリ同經度ニ從ツテ遼東灣北岸ニ至ル。

遼東灣東岸ニ在テ盛京省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島即チ東經百十九度乃至百二十三度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

### 第 三 條

前條ニ掲載シ、附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ、本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ、各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ、實地ニ就テ確定スル所アルベキセノトス。而シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ、地形上又ハ施政上ノ點ニ付キ完全ナラザルニ於テハ、該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任ズベシ。

境界劃定委員ハ成ルベク速カニ其ノ任務ニ從事シ、其ノ任命後一個年以内ニ之ヲ終了スベシ。

但シ該境界劃定委員ニ於テ更正スル所アルニ當テ、其更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ、本約ニ掲記スル所ノ經界線ヲ維持スベシ。

### 第 四 條

清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀三億兩ヲ日本ヘ支拂フベキコトヲ約ス。右金額ハ五回ニ分チ第一回ニハ一億兩、残り四回ハ各五千兩ヲ支拂フベシ。而シテ第一回ノ拂込ハ本約批准交換後六ヶ月以内ニ於テスベク、残り四回ノ拂込ハ、各其ノ前回ノ拂込ムベキ期日ト同時若クハ其前ニ於テスベシ。又第一回拂込ノ期日ヨリ以後未ダ拂込ヲ了ラザル額ニ對シテハ、毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フベキモノトス。

### 第 五 條

日本國ニ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ、右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スル者ハ自由ニ其ノ所有地ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ベシ。其ノ爲メニ本約批准交換ノ日ヨリ二個年間ヲ猶豫スベシ。但シ右年限ノ滿チタルトキハ、未ダ該地方ヲ去ラザル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ、日本國民ト視爲スコトアルベシ。

### 第 六 條

日清兩國間ノ一切ノ條約ハ、交戦ノ爲メ消滅シタレバ、清國ハ本約批准交換ノ後、速カニ全權委員ヲ任命シ、日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スベキコトヲ約ス。而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ、該日清兩國間諸條約ノ基礎トナスベシ。又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ、清國ハ日本國政府官吏商業航海陸



路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ、總テ最惠國待遇ヲ與フベシ。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ、而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六ヶ月ノ後有効ノモノトス。

第一、清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ、日本國臣民ノ商業住居工業及製造業ノ爲メニ左ノ市港ヲ開クベシ。但シ現ニ清國ノ開市場開港場ニ行ハル、所ト同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スベキモノトス。

- 一、北京
- 二、湖北省荊州府沙市
- 三、湖南省沙府湘潭縣
- 四、四川省重慶府
- 五、廣西省梧州府
- 六、江蘇省蘇州府
- 七、浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス。

第二、旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニ迄擴張スベシ。

- 一、楊子江上流、湖北省宣省ヨリ四川省重慶ニ至ル。

二、楊子江ヨリ洞庭湖ニ入り湘江ヲ溯テ湘潭ニ至ル。

三、西江ノ下流廣東ヨリ梧州ニ至ル。

四、上海ヨリ吳松江及運河ニ入り蘇州杭州ニ至ル。

日清兩國ニ於テ新章程ヲ安定スル迄ハ前記航路ニ關シ適用シ得ベキ限リハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スベシ。

第三、日本國臣民ガ清國へ輸入スル總テノ貨品ニシテ、其ノ輸入者又ハ貨主ノ都合ニ依リ、輸入ノ際又ハ其ノ後ニテ該貨品原價百分ノ二ノ抵代稅ヲ納メタル上ハ、清國各地方ニ於テ政府官吏一私人會社若クハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ、又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラルル一切ノ稅金賦課金取立金ハ其性質、竝ニ名義ノ如何ニ拘ハラズ總テ免除セラルベキモノトス。

日本國臣民ガ清國ニ於テ購買シタル清國貨品及生産物ニシテ、輸出ノ爲メナルコトヲ言明シタル上ハ、總テ抵代稅ヲモ納ムルコトナク前記ノ場合ト同様ニ、一切ノ稅金賦課金、取立金ヲ免除セラルベシ。而シテ斯ル免除ハ右言明ヲ爲セシ時ヨリ、實際輸出ノ時迄有効ナルモノトス。又清國ノ内地消費ニ供スベキ清國貨品及生産物ヲ日本國船舶ニテ清國開港間ニ運送スルニハ、一タビ現行沿海貿易稅ヲ納メタル上ハ、前記ノ場合ト同様、右運送申輸出入稅ハ勿論其他一切ノ稅金ヲ免除セラルベシ。但シ此ノ規定ハ輸入阿片ノ課稅ニ關シ、其ノ時現ニ行ハル、所



ノ取極メニ何等ノ影響ヲ及ボスコトナシ。

第四、日本國臣民ガ清國內地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ、又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地へ運送スルニハ、右購買品又ハ運送品ヲ倉入ル爲メ、何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナク、又清國官吏ノ干涉ヲ受クルコトナク、一時倉庫ヲ借入ルノ權利ヲ有スベシ。

第五、日本國民ガ清國ニ於テ納ムル諸稅及手數料ハ庫平銀ヲ以テスベシ。而シテ右諸稅及手數料ハ日本國本位銀貨ヲ以テ其代表價格ニ因リテ納金スルコトヲ得ベシ。

第六、日本國臣民ハ清國ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スル事ヲ得ベク、又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ、自由ニ各種ノ器械類ヲ清國へ輸入スルコトヲ得ベシ。

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ、各種ノ内國運送稅内地稅賦課金取立金ニ關シ、又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ、日本國臣民ガ清國へ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ特典免除ヲ享有スベキモノトス。

第七、清國ハ速ニ専門家ノ說ヲ採用シ、退潮ノ時タリトモ、少クモ二十呎丈ノ差支ナキ通路ヲ絶ヘズ維持スル様、黃浦河口ニ在ル吳淞淺瀬ヲ取除クコトニ着手スルコトヲ約ス。

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ、之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具裁スベキモノトス。

第七 條

現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ、本約批准交換後三ヶ月内ニ於テスベシ。但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フベキモノトス。

第八 條

清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スベキ擔保トシテ、日本國軍隊ガ左記ノ各地ヲ一時占領スルコトヲ承諾ス。

盛 京 省 奉 天 府  
山 東 省 威 海 衛

日本國ハ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ第一第二ノ二回拂込ヲアリタルトキニ於テ、其ノ軍隊ヲ奉天府ヨリ撤回スベク、又賠償金ノ最終回ノ拂込ヲアリタルトキニ於テ、其軍隊ヲ威海衛ヨリ撤回スベシ。然レドモ通商航海條約ノ批准交換ヲアリタル後ニ非ザレバ軍隊ノ撤回ヲ行ハザルモノト承知スベシ。

右一時占領スル諸費用ハ清國ニ於テ之ヲ支辨スベシ。

第九 條

本約批准交換ノ上ハ、直チニ其時現ニ有スル所ノ俘虜ヲ還附スベシ。而シテ清國ハ日本國ヨリス



ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待シ若クハ處刑セザルベキコトヲ約ス。

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜、若ハ犯罪者ト認めシタル者ハ清國ニ於テ直チニ解放スベキコトヲ約シ、清國ハ又交戰中日本軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ、如何ナル處刑ヲモ爲サズ、又之ヲ爲サシメザルコトヲ約ス。

第十條

本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スベシ。

第十一條

本約ハ大日本帝國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セラルベシ。而シテ右批准ハ明治三十八年

月 日即光緒 年 月 日ニ交換セラルベシ。

右證據トシテ兩國全權大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年 月 日即光緒 年 月 日下關ニ於テ五通作ル。

# 媾和條約案 (乙)

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ、兩國及其臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ、且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ、媾和條約ヲ訂結スル爲メニ、大日本國皇帝陛下ハ……………ヲ大清國皇帝陛下ハ……………ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ。因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好安當ナルヲ認メ、以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ。

第一條

清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認シ、將來該王國ノ内治、外交、一切干涉セザルコトヲ約ス。困テ右獨立自主ヲ損害スベキ朝鮮國ヨリ清國へ對スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スベシ。

第二條

清國ハ左記ノ土地ノ主權、竝ニ該地方ニ在ル堡壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。  
一、鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ湯子溝口ニ至リ、湯子溝口ヨリ北ノ方通化縣ニ互リテ直線ヲ畫シ、通化縣ヨリ西ニ向テ直線ヲ畫シテ遼河ニ達シ、右直線ト遼河トノ交會點ヨリ該河流ニ沿フテ下



リ、北緯四十一度ノ線ニ達シ、遼河上北緯四十一度ノ點ヨリ同緯度ニ沿フテ東經百二十度ノ線ニ達シ、北緯四十一度東經百二十二度ノ點ヨリ同經度ニ從フテ遼東灣北岸ニ至ル。

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ盛京省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬島嶼。

三、澎湖列島即東經百十九度乃至百二十度及北緯二十五度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

第 二 條

清國ハ左記ノ主權竝ニ該地方ニ任ル保壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。

一、鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ三叉子ヨリ北ノ方榆樹底下ニ互リテ直線ヲ盡シ、榆樹底下ヨリ正西

ニ向テ直線ヲ盡シテ遼河ニ達シ、右直線ト遼河トノ交會點ヨリ該河流ニ沿フテ下リ北緯四十一

度ノ線ニ達シ、遼河上北緯四十一度ノ點ヨリ同緯度ニ沿フテ東經百二十二度ノ線ニ達シ、北緯

四十一度東經百二十二度ノ線ヨリ同經度ニ從ツテ遼東灣北岸ニ至ル。

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ盛京省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島即東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

第 二 條

清國ハ左記ノ土地ノ主權竝ニ該地方ニ在ノ堡壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。

一、鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ、該河口ヨリ鳳凰城海城及營口ニ互ル折線以南ノ

地。

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ盛京省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島即東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

第 三 條

前條ニ掲載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ、本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ、實地ニ尙テ更定スル所アルベキモノトス而シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ、地形上又ハ施政上ノ點ニ付キ完全ナラザルニ於テハ、該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任スベシ。又該委員ニ於テ必要ト認メ、經界線ヲ變更スルニハ其ノ土地ノ限界及價值ノ點ニ於テ彼此相當ノ主義ニ依ルベキモノトス。

該委員ハ可成速カニ其ノ任務ニ從事シ、其ノ任命後一個年以内ニ之ヲ終了スベシ。

但シ該委員ニ於テ更定スル所アルニ當テ、其更定スル所アルニ當テ、其更定スル所ニ對シ日清兩

國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ掲記スル所ノ經界線ヲ繼續スベシ。



第四條

清國ハ軍事賠償金トシテ三億萬兩ヲ日本國ヘ支拂フベキ事ヲ約ス。右金額ハ五個年賦トナシ、第一回ニ一億萬兩ヲ支拂ヒ、残り四回ハ各五千萬兩ヲ支拂フベシ。而シテ第一回拂込ハ……月 日ニ於テスベク残り四回ノ拂込ハ毎年其ノ前年拂込ミ時日ト同時、若ハ其前ニ於テスベシ。又第一回拂込ノ期日ヨリ以來拂込ヲ了ラザル額ニ對シテハ、毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フベキモノトス。

第五條

日本國ニ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ、右割與セラレタル地方外ニ住居セムト欲スル者ハ、自由ニ其ノ所有地ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ベシ。其ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ一個年間ヲ猶豫スベシ。但シ右年限ノ滿チタルトキハ、未ダ該地方ヲ去ラザル住民ヲ日本國ノ都合ニ依リ、日本國臣民ト視爲スコトアルベシ。

第六條

日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シタレバ、清國ハ本約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ、日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スベキコトヲ約ス。而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章稀ヲ以テ、日清兩國間新約ノ基礎トナベシ。又本約批准交換ノ日ヨリ新約ノ實施ニ至ルマデハ、清國ハ日本國政府官吏通商航海陸路交通貿易工業船

船及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フベシ。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲スベシ。

第一、日本國臣民ガ清國ヘ輸入スル總テノ貨品ニシテ、其ノ輸入者又ハ貨主ノ都合ニヨリ、輸入ノ際又ハ其後ニテ該貨品原價百分ノ二ノ抵代稅ヲ納メタル上ハ、清國各地方ニ於テ政府官吏一私人會社、若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ、又ハ其利益ノ爲メニ課セラル、一切ノ税金賦課金取立金ハ、其ノ性質竝ニ名義ノ如何ニ拘ハラズ、總テ免除セラルベキモノトス。

日本國臣民ガ清國ニ於テ購買シタル清國貨品及生産物ニシテ輸出ノ爲メナルコトヲ言明シタル上ハ總テ抵代稅ヲモ納ムルコトナク前記ノ場合ト同様ノ一切ノ賦課金取立金ヲ免除セラルベシ。而シテ斯ル免除ハ右言明ヲ爲セシ時ヨリ實際輸出ノ時迄有効ナルモノトス。又清國ノ内地消費ニ供スベキ清國貨品及生産物ヲ日本國船舶ニテ清國開港間ニ運送スルニハ、一タビ沿海貿易稅ヲ納メタル上ハ前記ノ場合ト同様、右運送中輸出入稅ハ勿論、其他一切ノ税金ヲ免除セラルベシ。但シ此ノ規定ハ輸入阿片ノ課稅ニ關シ其ノ時現ニ行ハルル所ノ取極メニ何等ノ影響ヲ及ボスコトナシ。

第二、日本國臣民ガ清國內地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニハ、右購買品又ハ運送製品ヲ倉入スル爲メ、何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナ



ク、又清國官吏ノ干涉ヲ受クルコトナク、一時倉庫ヲ借入ル、ノ權利ヲ有スベシ。

第三、日本國臣民ガ清國ニ於テ納ムル諸稅及手數料ハ庫平銀ヲ以テスベシ。而シテ右諸稅及手數料ハ日本國本位銀貨ヲ以テ其ノ代表價格ニ因リテ納金スルコトヲ得ベシ。

第四、日本國臣民ガ清國ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク、又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ、自由ニ各種ノ器械類ヲ清國へ輸入スルコトヲ得ベシ。

第五、清國ハ速カニ熟練者ノ說ヲ採用シ、退潮ノ時タリトモ少クモ二十呎丈ノ差支ナキ通路ヲ絶ヘズ維持スル様黃浦河口ニ在ル吳淞淺瀨ヲ取除クコトニ着手スルコトヲ約ス。

此等ノ讓與ヲ十分ニ施行スル爲メニ必要ナル諸規則ハ本條ニ載スル所ノ通商航海條約中ニ包括セラルベシ。

第七條

日本國軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後六ヶ月内ニ於テスベシ。但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フベキモノトス。

第八條

清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スベキ擔保トシテ、日本國軍隊ガ左記ノ各城市ヲ一時占據スルコトヲ承諾ス。

此等各城市ハ本約ニ規定セシ軍費賠償金拂込ノ次序ニ隨ヒ、漸次軍隊ヲ撤回スベシ。即チ毎回拂込ゴトニ一ノ城市ヨリ撤回スベシ。但シ通商航海條約批准交換ノ後迄ハ軍隊ヲ撤回セザルベシ。

右一時占據ニ關スル諸費用ハ清國ニ於テ之ヲ支辨スベシ。

第九條

本約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ有ル所ノ俘虜ヲ還附スベシ。而シテ清國ハ日本帝國ヨリスク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若クハ處刑セザルベキコトヲ約ス。

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若ハ犯罪者ト認メラタル者ハ、直チニ解放スベキコトヲ約シ、清國ハ又交戰中日本軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ、如何ナル處刑ヲモ爲サズ、又之ヲ爲サシメザルコトヲ約ス。

第十條

本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スベシ。

第十一條

本約ハ大日本帝國陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セラルベク、而シテ右批准ハ本日ヨリ十五



日ヲ超ズ、可成速ニ……………ニ於テ交換スベシ。  
右證據トシテ兩國全權大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ。

# 講和條約案 (丙)

## 第一款

中日兩國公同認明 朝鮮爲<sub>ニ</sub>特立自主並公同保<sub>ニ</sub>其作爲<sub>ニ</sub>局外之國約<sub>ニ</sub>明或干預朝鮮內務於<sub>ニ</sub>其自主有礙或令修貢獻典禮於<sub>ニ</sub>其特立有礙者嗣後概行停止

## 第二款

中國允將管理下開地方之權併將該地方上所有城池公廨倉廠營房及一切屬公物件讓與日本

第一、奉天省南邊四廳州縣地方

一、安東縣

二、寬甸縣

三、鳳凰廳

四、岫巖州

以上四廳州縣所有四至均照原有界址爲據

講和條約案 (丙)



第二、澎湖列島北至北緯二十四度止南至北緯二十三度止東至英天文臺東經一百二十度止西至英天文臺東經一百十九度止應照英國海圖設經緯四線相交所成小方形之內茲特聲明以免相混

第三款

前款所載及粘附本約之地圖所劃疆界俟本約批准交換之後兩國應各選派官員二名以上為公同劃定疆界委員就地踏勘確定劃界若遇本約所訂疆界於地形或治理所關有礙難不便等情各設委員等當妥為參酌更定

各該委員等當從速辦理界務以期奉委之後限一年竣事阻遇各該委員等有更定劃界兩國政府未經認准以前應據本約所定劃界為正

第四款

中國允將庫平銀壹萬兩交與日本作為償給用兵之費該款分為五次交完第一次交二千八百萬兩嗣後每次交一千八百萬兩第一次約在本約批准交換後起計六個月內交清其餘四歐每次交款之期均與上次相隔一年共計本約批准四年半內一律文清或於期前交付均聽其便

第五條

中國讓與日本地方之居民如欲遷往所讓境外居住者應其任便變賣產業物件退出界外並不因此勅令輸納公捐稅鈔等項今訂明自此約批准互換後與限兩年俾其辦理此事限滿之日其尚未遷徙者日本可視同日本臣民至中國臣民已由所讓之境退出並不僑居其地而產業物件仍在所讓境內者應由日本政府一律優待保護與日本臣民之產業物件無異

第六款

兩國前此所有約章均以戰停廢今中國日本約明俟此約批准互換之後各派全權大臣會商訂立水陸通商章程其新訂約章即以中國與泰西各國現行章程為本所有口岸行船鈔躉貨稅等項悉照中國所待泰西最優之國無異又本約批准交換之日起新訂水陸通商約章未經批准之前所有日本政府官吏商務行船邊海通商工作船隻臣民等與中國最為優待之國禮遇護視亦當一律無異

第七款

日本除照本約第八款暫行佔守軍隊外其現駐中國境內者應於本約批准交換之後一個月內全行撤回

第八款

中國為保明認真實行約內所訂條款聽允日本軍隊暫行佔守山東省威海衛俟本約所訂應賠軍費第一第二兩次交到日本立將軍隊一半撤回未次軍費交清立即全撤



第九款

本約批准交換之后兩國應將是時所有俘虜盡數交還中國約將由日本國所還俘虜並不加以此  
虐待若或置於罪戾

中國約將認爲軍事間諜或被嫌疑擊之日本國臣民即行釋放併約此次交仗之間所有關涉  
日本國軍隊之中國臣民概予寬貸併飭有司不得擅爲逮繫

第十款

本約一經中日兩國全權大臣畫押之日應即按兵息戰

第十一款 (擬添)

現爲預防將來中日兩國更有爭端戰爭或因解釋此約或遵行此約彼此歧異又或會議或  
解釋或遵行第六款內所云之通商行船條約邊界通商條約兩國政府意見不合非會議公牘所能辯  
結者兩國約明應公請友邦保薦公正人代爲決斷如兩國所擬請之公正友邦仍不能合則由美國  
總統保薦一人充當公正人代爲決斷兩國約明公正人所下斷語必當信實遵行

第十二款

此約俟下進呈

大清帝國

大皇帝陛下

大日本帝國

大皇帝陛下御覽以爲妥協竝御筆批准 後定於某處其年某月某日互換 今欲有憑兩國全權

大臣畫押蓋印以照信守

某年某月某日在下之關訂共計四分



## 大本營ヲ前進セシメザル可カラザル理由

作戰上最高司令部ノ出來得ル丈ケ作戰軍ニ近折シ在ルノ如何ニ必要ナルヤハ、少シク兵事ヲ解スル者ノ皆ナ能ク了知スル所ナリ。蓋シ大作戰ノ勝敗ハ、獨リ其計畫ノ善惡適否ニ關スルノミナラズ、之ヲ各部諸機關ニ傳達スルノ遲速便否如何ニ關スルコト亦タ頗ル大ナリ。

夫ノ作戰大計畫ノ如キハ、固ヨリ平時ヨリノ計畫及戰役開前後ノ諸狀況ヲ參酌シ之ヲ決定スベキハ勿論ナリト雖モ、愈々之ヲ實地ニ踐行スルニ當リテハ、時々刻々ノ決心ヲ定メ、更ニ新命令ヲ發セザル可ラズ。以上二個ノ理由、即チ第一彼刻下ノ現況ヲ審ニシテ。新計畫ヲ建テ、第二之ヲ適當ノ時機適當ノ場所ニ於テ各機關ニ傳達スルノ至便ニシテ且ツ違算無ラシメンガ爲ニハ、最高司令部ハ後方諸準備ノ整頓次第、成ル可ク遠ク進出シ在ルコト尤モ緊要ナリ。蓋シ此位置ノ適否ニ因リ、戰役ノ結局ノ勝敗ニ至大ノ影響ヲ及ボセシ者、古來類例極メテ多シ。就中七十年役普軍大本營ノ如キ、文祿征韓ノ役豊太閣名護屋ノ滯陣ノ如キ、之ヲ證シテ餘アル者トス。假リニ當時普ノ大本營ヲシテ其ノ位置ヲ撰ムコト彼レガ如ク適當ナラズシテ、而シテ其新計畫ヲ實行スルコト、彼レガ

如ク敏活ナラザラシメバ、「ヴョールト」ノ敗後、佛將「マクマホン」ハ或ハ優力ニ「メツツ」ノ攻圍ヲ破リテ、「バゼーヌ」ヲ重圍ノ中ニ拔キ、兩軍相合シテ猛然更ニ一大決戰ヲ試ミ得タルヤモ知ル可ラズ。又曩キニ太閤ヲシテ、新シク諸軍ヲ督シテ滿韓ノ野ニ馳逐セシメバ、假令朱明ノ全土ヲ席捲シ能ハザリシトスルモ、其戰機ヲ誤ル彼レガ如ク甚シカラザリシナラン。夫レ然リ、故ニ大軍ヲ統ブルノ最高司令部タル者ハ、背後ノ事情之ヲ許スニ至レバ成ル可ク遠ク前進シ在ルコト尤モ緊要ナリ。而シテ此緊要ノ度ハ、兩軍主力ノ近迫、即チ本戰ノ時機切迫スルニ從ヒ、益々増大スル者トス。

今ヤ我征清ノ軍ハ、背後ノ準備既ニ整頓シ、各軍ハ不日相竝ンデ直隸ノ野ニ進入シ、彼レ愛親覺羅氏ノ主力ト衝突シテ、一大決戰ヲ試ミントス。乃チ大本營タル者今ヤ此各軍ヲ統帥シテ親シク作戰ノ指揮ヲ執ラザル可ラズ。之レガ爲メニハ大本營ノ前進ハ目下誠ニ緊要ニシテ、決シテ止ム可ラザルニ至レリ。若シ強テ内地ニ在テ此指揮ヲ執ラント欲スレバ、所謂彼我刻下ノ情況ヲ審カニシテ新計畫ヲ建テ、新命令ヲ適當ノ時機適當ノ場所ニ於テ下達スルノ最大事件即チ大作戰指揮ノ全手段ハ舉テ之ヲ彼ノ一條ノ電線ニ委セザル可ラズ。然ルニ從來此電線ノ効用極メテ大ナリシニモ拘ラズ、其今日以後特ムニ足ラザルヤ實ニ左ノ如シ。蓋シ旅順若クハ岫巖方面ヨリ、廣島ニ至ル普通ノ電報ハ、途中些ノ故障ナキ場合ニ於テモ、概ネ十數時間ヲ要ス。況ンヤ賴信輻輳スルノ場合ニ在テ



ハ、更ニ數時間ヲ加算セザル可ラズ。加之直隸平野ノ本戰ニ在テハ、旅順港及渤海北岸上陸點間ノ航海時間凡ソ十二時間ヲ加算スルヲ要ス。故ニ廣島ニ於ケル大本營ガ直隸作戰軍ノ報告ニ接スルハ早クモ二十時間以上、即チ約一晝夜ニシテ、此報告ニ據リ新計畫ヲ建テ新命令ヲ發スルマデニハ是レ亦タ早キモ七九時乃至十數時間ヲ要スルコトハ、從來ノ事實ニ於テ既ニ明瞭ナリ。之レニ命令發達ノ時間約一晝夜ヲ加フルトキハ、敵情報ノ始メテ戰地ヲ發シテヨリ、新命令ノ戰地ニ達スルマデハ、途中毫末ノ支障無シトスルモ約三日ヲ要スル割合ナリ。況ンヤ軍ハ師團ニ傳ヘ師團ハ之ヲ各部團隊ニ傳フルノ時間亦タ決シテ僅少ナラザルニ於テヲヤ。然レドモ是猶ホ可ナリ。更ニ進ンデ左ノ事實ヲ審明セバ、事理ヲ解スル者必ズ寒心セザル無カル可シ。

蓋シ電信ノ物タル、平時内地ニ於テ殊ニ數條ノ導線ヲ有スル者猶ホ且ツ時ニ不通ノ患ナキ能ハズ然ルニ今回我使用シツツアル滿韓電信ノ如キハ、其構造固ト不完全ナルノミナラズ、沿道ノ民居ハ反覆朝夕ヲ保タズ。加フルニ風雪水氣等天候ノ變甚シキコト亦タ内地ノ比ニ非ラズ。即チ去年十二月以東ノ實況ヲ檢スルモ、實ニ左ノ如ク、其十一月中ニ於ケル不通ハ凡ソ十一回、二百二十五時間餘、即チ九日ト九時間餘ニ相當シ、十二月ハ十回、三百零四時即チ十二日ト十六時間餘。超エテ本年一月ニ至テハ、十八回、二百八十八時即チ十二日餘ニ過セリ。之ヲ一讀スル者果シテ何ノ感ヲカ爲ス。右三ヶ月間ノ實驗ニ徴スレバ、其全通時間ハ多キモ二十日前後ニシテ、十二月及一月ノ如

キハ殆ンド月ノ一半ニ過ギザリシニ非ラズヤ。而シテ不通一回ノ時間ノ如キモ、時ニ一百二十時ノ長キニ達スル者アリ。即チ十二月十三日ヨリ同十七日ニ至ル水蒸氣ニ基因スル不通ノ如キ是ナリ。其他一日間乃至二三日間ノ不通ノ如キハ比々皆然リトス。前キニ途中一故障ナシトスルモ、大本營ノ命令ハ敵情報後早クモ三日前後ニアラザレバ戰地ニ到着シ能ハザルコトヲ縷陳セリ。然ルニ實際ハ此三日ニ加フルニ更ニ電信不通ノ時間ヲ以テセザル可ラズ。

斯ノ如ク積算シ來ルトキハ、大本營命令ノ到達ハ敵情報ノ後如何ニ早キモ三日以上ヲ要シ、尤モ普通ノ場合ニ於テハ、一週日乃至二週日以上ヲ要スル者ト覺悟セザル可ラズ。夫レ然リ、此長時間ニ於テ、其狀ハ果シテ如何カ變化スベキ。實ニ我本作戰地ノ北京若クハ天津ヲ距ルハ遠キモ七八十里ヲ過サズシテ其間數條ノ大道路アルノミナラズ、彼レ清軍ハ鐵道電線ノ利器ヲ有スルニ非ズヤ。而シテ其鐵道電線ハ素ト彼レガ幾内ノ架設ニ係リ、遠近長短ノ差ハ暫ク措キ、其安否ノ懸隔ハ到底我が滿清電信ノ比ニ非ザルナリ。實ニ彼レノ電信鐵道ハ其安全ノ一點ヨリ言フトキハ、猶ホ我が駿遠若クハ白河地方ニ來往交通スルガ如キノミ。即チ敵ハ我新命令ノ未ダ到着セザルニ及ンデ、早ク既ニ其配備ヲ一變シ、或ハ進ンデ大ニ我ヲ攻撃スベク、或ハ去テ遠ク堅固ノ陣地ヲ守ルベク以テ集ムベク、以テ分ツベシ、所謂進止分合ノ機先ヲ制スル、一二彼レ清軍ノ隨意ナリ。而シテ我レハ則チ遠ク數百里ノ山野河海ヲ間シテ、而カモ不完全ナル一條ノ電線ト、發着確定シ難キノ船舶ト



ニ由リ、全軍ニ死活ノ作戰命令ヲ發セザル可ラズ。思ツテ此ニ至ル、豈寒心ニ堪フ可ケンヤ。蓋シ我命令傳達法ノ不完全ナル斯ノ如クナリシニモ拘ハラズ、今日マデ事實上甚シキ支障ナキヲ得タル所以ノ者ハ、従前ノ各戦闘ハ誠ニ局地ノ一交戦ニ過ギザリシヲ以テ、大本營ハ單ニ大作戦計畫ニ基ケルノ一般訓令ヲ與ヘ、其實施ハ舉テ之ヲ各當該司令官ニ一任シ、自ラ直接ニ作戰ノ指揮ヲ執ラザリシト、地皆一方ニ僻在シ、援軍猩狗等轉送ノ困難ナルハ彼亦タ我レト大同小異ニシテ、容易ニ其戦局ヲ一變スル能ハザリシニ聯由ス。然ルニ自今ニ於テ起ルベキ直隸平野ノ大本戦ニ在テハ、形勢全ク之レト相違ス。即チ大本營ハ竝立セル各軍司令官ヲ統帥シテ、直接ニ作戰ノ指揮ヲ執ラザル可ラズ。然ラザレバ諸軍動作ハ決シテ同一目的ニ向ツテ、齊一ナル能ズ。又一面ニ於テ敵ハ頗ル短時日ニ於テ其配置ヲ一變シ得ベキヲ以テ、之ニ對スル我大本營ノ命令ハ最モ敏活ヲ要シ、往々分秒時間ヲ爭ハザル可ラザルモノアラントス。況ンヤ背後ノ準備ハ既ニ整頓セリ。乃チ今ヤ大本營ハ機ヲ見テ必ズ前進セザル可ラズ。

前述ノ必要ニ因リ大本營ハ凡ソ  
左ノ如ク前進スルヲ要ス

一、先ヅ金州半島ニ移ルベシ

斯クノ如クスルトキハ直隸本戦ニ對スル命令傳達線中、尤モ不完全ナル滿韓電線及釜山對馬間ナル外國線、竝ニ其以東廣島ニ至ル内國線共計五百四五十里ヲ全削シテ電線ヨリ生ズル命令ノ遲滯ハ全ク之ヲ排除スルヲ得ベク、即チ該半島ヨリ發スル大本營ノ命令ハ、海上風波ノ故障ナケレバ、約十二時間ヲ以テ直隸作戰軍ニ到達スベク、一日半前後ニシテ報告及命令ノ相往復スルヲ得ベシ。本戦ノ初期ニ在テハ概ネ此速度ヲ以テ甚シキ支障無キヲ信ズ。其他該半島ノ盛京省方面ハ勿論、威海衛及北部朝鮮諸團隊ヲ指揮スルニモ便利ナルコトハ明瞭ニシテ、其澎湖島方面ニ對スル亦タ寧ロ廣島ニ優ルモノアリ。又タ清國海軍ノ現況ニ於テ、該半島ヲ行營トスルモ萬々危険ナキコトハ今後復タ言フヲ要セズ。況ンヤ我海軍ノ一部ハ常ニ其近海ニ動作スベキニ於テヲヤ。

二、次ニ直隸ニ進入ス可シ

我上陸軍漸ク前進シテ決戦愈々切迫シ來ルヤ、戦機益々分秒ヲ爭フ。此時ニ至テハ遠ク波濤ヲ隔テテ對岸ノ戦ヲ指揮スルガ如キ優長ノ手段ヲ許サズ。大本營タル者必ズヤ作戰軍ノ直背ニ占位セザル可ラズ。

三、然レドモ

大元帥陛下萬已ムヲ得ザルノ御支障ニ困リ御親征アラセラレザルノ場合ニ在テハ參謀總長ヲ以

大本營ヲ前進セシメザル可カラザル理由



テ帝國全軍ノ總指揮官ニ任ジ、委スルニ指揮ノ全權ヲ以テシ、之ヲシテ代テ出征セシメラル、コトハ實ニ已ムヲ得ザルノ手段ナルベシ。要スルニ愈々本戰ヲ決セントスルノ場合ニ在テハ帝國全軍ノ總指揮者ハ如何ナル手段ヲ以テスルモ必ズヤ作戰軍主力ト相接近シアラザル可ラズ。

明治二十八年二月

大本營陸軍參謀

日本ノ對韓政策ト露國ノ輿論

日清講和ノ後遼東半島ノ分割ニ關シ、露佛獨三國ガ提出シタル共同抗議ニ對スル日本ノ讓歩ハ、東洋ノ平和ヲシテ愈々再興セシムルノ好果ヲ來タシ、從テ最初ハ飽迄置々異口同音ニ日本ニ反對シタル當國諸新聞モ、其後從前ノ筆鋒ヲ收メ、暫ク鎮靜ノ姿ニ見エシガ、近來日本ノ對略政略等ニ關シ、彼是論評ヲ爲スモノ少カラズ、就中「ノウオエ、ウレミヤ」新聞ハ去ル五月十二日ノ紙上ニ於テ朝鮮ノ現狀ヲ論ジテ曰ク、

支那海上ニハ歐洲一般ニ關スルノ利益アリ先キニ之ヲ保護スルノ必要アリシニ由リ、露國ハ他ノ二大國ト提携シテ共同的運動ヲ爲シタリト雖ドモ、此海面ニハ獨リ歐洲ノ共同利益ニ止ラズ全ク之ト相異ナル露國固有ノ利益ノ存在スルアリ。然ルニ此ノ利益ヲ徒ラニ歐洲ノ裁判ニ付シ又ハ其監督ニ委スル如キハ、露國ニ取り不得策ノ甚シキモノニシテ、却テ露國ノ威力ヲ減縮シ、將來ノ禍根ヲ醸スニ過ギザルナリ。曩年露國ガ歐洲ノ爲メ屈從セシメラレタル「ボスホラス」問題ノ殷鑑遠カラズト雖ドモ是レ全ク「クリミヤ」戰爭ノ失敗ニ由馴致シタルノ結果ニシテ、露國モ亦之ヲ如何トモスル能ハズ。獨リ朝鮮ニ於テ露國ガ首座ヲ占ムルノ權ハ、決シテ



拋棄スベカラザル而已ナラズ益々之ヲ鞏固ニセザルベカラズ。況ンヤ今日ハ支那海上ニ於ケル歐洲一般ノ利益ハ、既ニ三國ノ共同抗議ニ對スル日本ノ決答ニ由リテ損傷ヲ免カレ、最早同盟諸國ハ退テ各其固有利益ニ關シ、計畫ヲ爲スノ時ナルニ於テオヤ。元來三國各自ノ私利モ亦タ共同運動ノ方法ニ由リ之ヲ保護シ得ベキモ、露國ハ決シテ他國ノ應援ニ依頼シテ固有ノ利益ヲ保護スルノ念ヲ抱クベカラズ。自ラ進デ獨力經營ヲ爲スノ覺悟ナカルベカラズ。今ヤ日本ハ一時ノ好機ニ乗ジ、朝鮮ヲ全ク經濟的ニ服從シ、國王ヲ其手中ニ擒ニシ、鐵道及探礦ノ營業ヲ專領シ、而シテ尙ホ朝鮮ヲ獨立國ト公布スルモ、果シテ何ノ實力アラン。露國ガ今日込朝鮮ヲ等閑視シタルハ一大失策ニシテ、同國ハ露西亞ノ對亞政略上及亞細亞領土ノ將來發達上、頗ル樞要ノ地位ヲ占ムルモノナリ。若シ露國ノ公正ナル妄想トシテ「シベリヤ」鐵道ヲ黃海々岸ニ貫連セシメンコトヲ豫期セバ、該鐵道ノ極點ヲシテ將サニ清兵ノ屯守スベキ旅順口ト日本ノ鎮臺、行政官及商估ガ蹂躪スル朝鮮トノ間ニ在ラシメザルヲ得ズ。是レ露國ノ爲メ頗ル悲ムベキノ一事ナリ。日本ハ新ニ占領シタル境土内ニ於テ、平和的發達ヲ謀ルハ素ヨリ可ナリト雖モ、露國ガ互寒ナル「シベリヤ」ヨリ南方ノ暖海へ突進セントスル門戸ヲ封鎖スル如キニ至テハ、到之ヲ不問ニ付スベカラザルナリ。若シ事情果シテ前述ノ如キ場合ニ至テハ、露國ガ忽チ日本ノ外交ト衝突スルハ到底免カルベカラザルモノニシテ朝鮮ノ現狀ハ如此キ關係ヲ釀成スベキ傾リ云

ト論ゼリ。次ニ「グラジタニン」新聞ハ六月一日ノ紙上ニ於テ、朝鮮ニ關スル「モスコーフスキ」ウエドモスチ」新聞ノ論說ヲ評シテ曰ク。

該新聞ハ今回臺灣ニ於テ共和國ノ設立ヲ公布セシニ由リ、其機ニ乗ジ朝鮮ヲ露國ノ保護國ト爲スノ持說ヲ再述セリ。即チ「若シ朝鮮ガ獨リ名分上ニ止マラズ、實際獨立ノ實ヲ表シ得ルモ、露國ハ將來ニ於テ何等危懼スルコトナク、露國ト朝鮮トノ間ニハ常ニ親睦ノ關係ヲ保持スルコトヲ得ベシ。然レドモ若シ一朝朝鮮ヲシテ他邦殊ニ日本ニ從屬セシメントスルニ至テハ、是レ全ク問題ヲ異ニシ、露國ハ決シテ之ヲ許スヲ得ズ。又許ス能ハザルモノニシテ、將來絶東ノ事情果シテ如此キニ至ルモノナリトセバ、露國ハ朝鮮ヲシテ一日モ速カニ其保護國タラシムルコト最モ緊要ナリ」ト論ジ、且ツ「日本人ガ臺灣ノ反逆者ヲ壓服スルハ、大陸ニ於テ清兵ト交戦



シタルヨリ困難ナルベシ。如何トナレバ臺灣ノ住民ハ勇悍ニシテ黄色人種中ノ海賊ヨリ成立シ、且ツ共同一致ノ精神ニ涵養セラレタルヲ以テ、之ヲ服従スルハ決シテ容易ノ事業ニ非ラズ。日本モ爲メニ其國力ト時日ヲ徒費スルコト鮮少ナラザルベシ。故ニ今日ハ露國ノ爲メ朝鮮ノ問題ヲ決スルニ最モ適合スル好時機ナリ云々」

ト論ジタレドモ、惜イ哉該新聞ハ從前ノ論說ト均シク朝鮮ヲ露國ノ保護ニ屬セシムルノ問題ニ關シ、公平ナル同盟諸國ノ意見ヲ考ニ供セザルヲ如何セン。現ニ佛獨兩國ハ本件ニ關シ、未ダ何等ノ意見ヲモ吐露セズ。況ンヤ英國ノ如キ徹頭徹尾露國ノ反對ニ立ツノ邦國アルニ於テヤ。

ト該新聞ヲ批評セリ。又「グラジタニン」新聞ハ絶東ニ於ケル露獨佛三國ノ共和運動ニ關シ、五月二十一日ノ紙上ニ於テ、

「近頃佛國ノ新聞中「フヒガロ」「ゴロア」「ソルイユ」「オトリテ」等ハ頻リニ佛國ノ對亞政略ヲ論ジ、何レモ同國外務大臣ト露國ニ向テ駁撃ヲ加ヘ「アノツト」氏ハ全ク他國ノ爲メ蠱惑セラレ、自國固有ノ利益ヲ忘却シ佛國ガ露國ノ爲メニ盡シタル功績ヲ利用スルノ途ヲ知ラズ。露國ハ佛國ノ義俠的行爲ニ感ゼズシテ、獨國ト共ニ飽マデ私利ヲ營ムニ急々タリ。且ツ露國ハ佛國ガ參同スルヲ屑シトセザルノ「キール」ニ引招セリ。是ニ於テ實際上三國同盟ヲ造出セリト

雖モ、佛國ハ獨リ嗤フベク且ツ悲ムベキノ地位ニ立テリ云々ト論ジ、獨リ露國ヲ罪スル而已ナラズ自國政府ノ處置ヲ非議セリト列舉シ「ノウオユ・ウレミヤ」新聞ノ如キハ、之ヲ一時ノ政略的現象ニ過ギズト臆斷スレドモ、如此キ重立タル新聞、殊ニ「フヒガロ」ノ如キ最モ有名ナル新聞紙ニシテ前述ノ論說ヲ掲載シタルハ、多少輿論ノ反響タラザルヲ得ズ。抑モ佛國ハ露國ノ最モ信憑ヲ措クトコロノ友邦ナルニ於テオヤ。露國ガ素ト他國ノ應援ニ倚賴スルハ大ナル誤謬ニシテ、露國ハ早晚絶東ニ於テ一時ノ勝利ヲ博シタルガ如ク思料スレドモ、是レ決シテ飽意スベキノ時ニ非ズ宜シク進ンデ從前孤立獨歩ノ政策ヲ保續シ、益々其根據ヲ鞏固ニセンコト實ニ目下ノ急務ナリ云々」

ト論結セリ。又外務省ノ機關ナル「ジュルナル・デ・サン・ペテルブル」新聞ハ、絶東問題ニ關シ容易ニ詳說ヲ掲ゲザルモ、去ル本月五日ノ紙上ニ左ノ如キ臺灣ニ關スル記事ヲ掲ゲ、其意向上日本ニ同感ヲ表スルモノ、如シ。

即チ、  
「絶東ノ來電ニ依レバ日本人ガ臺灣島ヲ占領セル事情ノ詳細ヲ知ルヲ得タリ。五月廿八日、日本ノ艦隊ハ同島ノ鷄籠港ニ到着セシトキハ、多勢ノ臺灣人ハ同港ニ集合シテ其上陸ヲ妨ゲン爲メ、一時抵抗ヲ試ミシモ、唯ダ人數ノ多キノミニテ其詮ナク、日本軍ノ爲メ砲撃セラレ、斃死



スルモノ多ク暫クニシテ潰走シタリ。右電報ニ由レバ此一戦ニ於テ殺サレタル者三百餘人、日本軍ハ一兵卒ヲモ失ハズト云フ。此一撃ニ由リ臺灣共和政府ハ自ラ顛覆スベシト雖モ、此騒亂ニ乗ジ暴兵ト無頼ノ徒ハ奪掠ヲ肆行シ、内地到ル處攘亂ノ有様ヲ呈シ日本軍ハ鷄籠ヲ占領セシヨリ直ニ内地ニ向テ進軍シタリ云々」

右御參考迄抄譯差出候 敬具

明治廿八年六月十二日

秘書類纂

雜

纂其四終

秘書類纂

雜

纂其四

人名索引

(1)

伊藤博文

六、八〇、八二、八三、八四、八五、八七、九〇、  
 一三八、一四〇、一四六、一五三、一五三、一五四、  
 一五九、一六九、一八〇、二〇一、二〇三、二〇四、  
 二〇五、二〇六、二二一、二三〇、二三一、二三三、  
 二三四、二四四、二三八、二三九、二四〇、二五七、  
 二五五、二七〇、二七一、二七三、二七五、二七五、  
 二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、  
 二八三、二八四、二八六、二八九、二九二、二九七、  
 二九八、三〇一、三〇三、三〇六、三〇八、三二〇、  
 三三三、三三四、三五、三六、三三二、三三四、  
 三三七、三四〇、三四四、三四五、三五三、三五三、  
 三五四、三五五、三五八、三五五、三六七、三六八、  
 三七〇、三七五、三七六、三九一、三九一、三九三、

人名索引

伊藤藤右衛門  
 岩倉 具視

三九七、四〇〇、四〇三、四〇四、四一三、四一九、  
 四二七、四三九、四四三、四四四、四四五、四六、  
 四六七、四七三、四七三、四七八、五〇二、五〇三、  
 五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、  
 五二〇、五二一、五二二、五二三、五二四、五二九、  
 五三〇、五三二、五三三、五三三、五三四、五六七、  
 五七三、五七三、五七五、五七六、五七七

板垣 退介  
 裕 祿  
 井上 馨

七四  
 八一  
 九、一〇四、一〇四、二二八、二二九、二四〇、  
 二七一、二七五、二七六、二七七、二八〇、二八三、  
 二八六、五三六、五三六、五三九、五七〇

石田甚右衛門  
 井手彌六左衛門  
 尹 順

二八  
 一三〇、一三一  
 一三七  
 二九一

伊東己代治  
 井上 良馨

イヌボルスキー  
 三五六、四四六、四五五、四五九、五〇二  
 五三五、五三六



尹 滋 承 五三六、五三三、五三八  
井上勝之助 五〇八  
井上 毅 五七〇

花房 義質 五四七、五四八、五五〇、五五一、五五二、五五三、五五五、五五六、五五七、五五九、五六一  
馬 建 忠 五五九、五六〇

(ロ)

(二)

呂 祐 吉 一三二  
ログラン 二二六  
ローゼン 二九一、二九六  
ローズベリー 五〇一

任 統 一三五  
ニコライ二世 二〇三、二三四  
西 徳二郎 四五一

(ハ)

(ホ)

林 權 助 八〇、一四三、一四四、一四六、一四七、一五九、一六四、一六八、一六九、一七九  
林 董 二〇三、二〇四、二〇五、二一九、二二一、二二三、二三四、二三五、二三六、二三八、二三九、二四一、二四三、二四四、二四九、二五九、二六〇、二六三、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二九七、二九八、三三二、三三三、三三四、三八九  
ハインリツヒ 二八八  
バーリントン 三三三  
ハンネツケン 四三三

朴 齊 純 九〇、九一、一五九、一七九  
朴 鏞 和 九二、一四八、一七三  
朴 泳 孝 五三四、五三五、五六〇、五六五、五六七、五六九、五七九  
堀本 禮造 五五六、五五九  
(ヘ)  
ベルチー 二二二、二二三  
ヘンリー・クルース 四七三、四七八

時岡 茂弘 〇  
トーマス・ウエード 四三三、四三三

(チ)

李 載 允 一四三  
李 載 克 一四四  
李 鴻 章 一五一、三三三、三三四、三三五、三三六、三四〇、三四五、三五一、三五三、三五四、三五五、三七九、三八〇、三八一、三八三、三八四、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九二、三九三、三九六、三九七、三九八、四〇二、四〇四、四〇五、四一一、四二七、四二八、四二九、四四一、四四三、四四四、四四五、四五三、五七四、五七五、五七六

張 蔭 桓 八、三八、三九、三〇、三三、三六、三五、三六、三六、三六、三七、三七、三七六、三七七、五〇二、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一〇、五一一、五二二、五二三、五二八、五二九、五三〇、五三二、五三三、五三四、五三五

趙 相 綱 一三七

李 址 鎔 一五九、一七四、一七七

沈 秉 薰 一五九、一七二

李 夏 榮 一五九、一六三、一七三、一七六

池 運 永 五三四、五七九

李 根 澤 一五九、一七四

趙 寧 夏 五七二

リヒトホーヘン 二八六

陳 樹 棠 五〇〇、五六三

李 經 方 三三五、三三六、三三七、三四〇、三四五、三五二、三五三、三四四、三五六、三九六

(リ)

リビンダストン 四七五

李 景 稷 一三三  
李 琿 一三四

李 善 得 五八三  
李 鉉 相 五八三



李祖淵 五五、五六  
李會正 五〇  
李逸植 五八、五九

(ル)  
ルーベール 三〇、三二  
ルーズヴェルト 三五

(オ)  
大木喬任 二八、三  
大岡育造 〇  
王文韻 八  
大三輪長兵衛 五六

(ワ)  
ワルデルゼー 二七、二八  
渡邊國武 四一  
ワイルド 四七

(カ)  
加藤斌 六、八、一〇

黎庶昌 五七

(ソ)  
副島種臣 一〇六  
宗重臣 一〇七  
宗義調 二六  
宗義智 二六、二七、三〇、一三、一三、一三  
ソルスベリ 二六、三〇

(ツ)  
東田喜三郎 一〇九、一一〇  
都筑馨六 二〇六、二二、二六、二四、二五、二七、  
二八、二五、二六、二七、二八、二八、  
二九、三〇、三一、三二

(ナ)  
南龍翼 一三七  
中田敬義 三三、三五、三六、五〇

(ラ)  
ラムスドルフ 二〇、二四、二七、二八、二九、二五、

韓圭高 一四、一七、一七、一七、一七、  
一七

桂太郎 二〇、二四、二五、二六、二二、  
二〇、二四、二五、二七、二七、  
二七、二九、二八、三一、二四、二九、  
三〇、三六、三〇、三二〇  
四七九、四八〇、四八三、四八五、四八六、四八八

(ヨ)  
カメロン 九七、一〇一、一〇六、五五  
吉岡弘毅 二五  
米田喜三郎 四一  
芳川顯正 四一

(タ)  
大院君 一八、五五  
田中正平 二八  
竹添進一郎 五四、五〇、五二、五六

(レ)  
聯芳 四八、四九、四六〇  
レンホルム 四三、四六、四五

ランスダウン 二五、二四、二五、二七、二七、  
二八、二九、二九、二九、二六、  
二九、三〇、三六、三〇、三〇、  
三〇、二九、三〇、三二、三三、  
三四、三三、三三、三〇、二六、  
二七、二八、三一、三七、三三

(ム)  
除奥宗光 三三、三四、三六、三四、四五、三五、  
三五、三四、三五、三六、三六、  
三七、三七、三七、三九、三九、  
四〇、四四、四三、四二、四二、  
四四、四五、四一、四一、五〇、  
五〇、五〇、五〇、五〇、五〇、  
五二、五三、五二、五二、五二、  
五三、五二

(ウ)  
浦瀬好祐 一一、一二、一三  
ウキツテ 二〇、二四、二五、二七  
ゾオツルン 二五、三〇

(ノ)



野村 靖 四六三

(ケ)

栗野慎一郎 二〇六、二〇七、二〇九、二一〇、二一三、二一四、三三三、三三六

クロード・マクドナルド 三三二、三三三、三三三、三三四

グレシヤム 四八〇

黒田 清隆 五五五

(ヤ)

柳川 調信 一三三

山縣 有朋 二〇四、二七七、二八三、二八六、三〇一、四六一

(マ)

松方 正義 四六一

マクマホン 六九

(ケ)

慶親 王 八二、八三、四七五

玄暎 運 九三

慶暹 一三二

(フ)

深見 六年 一〇九、一一三、一二四

フランス、プーチヤン 三五、三三七、三八

フォン、デム、クネーゼヘック 二八六

フォン、ブランド 四三三、四四四、四六五

ブランド 四八九

フー ド 五三三、五三三

(コ)

後醍醐天皇 七三

國分象太郎 九三、九三、一四二、一四八、一六九、一八〇

高義 敬 九三

黄重 床 一三五

権重 顯 一五九、一六五、一七五、一七六、一八〇、三三五、三六、三八、三九、三九、三五、二六〇、二六、二六、二九、二九六、三〇一

小村壽太郎 三七四、三七六、四五六、四五八、四五九、四六〇、五〇五、五〇六、五三四

伍廷 芳 四七三、四七六、四七七、四七八

コケリル

(ア)

青木周藏 四五一

愛親覺羅 六四

(サ)

櫻井能監 一、二

三條實美 二八、三八、七、五七、五七三

相良圓藏 一〇一

相良正樹 一〇六

齋藤兵衛三郎資定 一三五

西郷從道 四六、五八、五七三、五七七

西園寺公望 四六二

(キ)

姜弘重 一三五

金世濂 一三五

金綺秀 五三三、五四五、五五一

金玉均 五三四、五三五、五六〇、五七八、五七九、五七〇、五八八

キムバーレー 五〇一

吳大 徵 五七、五八、五七〇、五七四

洪英 植 五六四

近藤真 鋤 五七〇

洪鐘 宇 五八八

權東 壽 五八八

權左 壽 五八八

(エ)

袁世 凱 一五一

エルデン 四二

榎本武 楊 四六、五七、五四、五七、五八

(テ)

丁好 寛 一三一

鄭笠 通 一四

デルカッセル 一四

デンベ 一〇二、二〇六、二六

デニソン 四四

デフレスト 四七〇

丁汝 昌 五五九



金嘉鎮 五八六  
金宏集 五三三、五三七、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇

金晚植 五七〇

金炳始 五七〇

金恩轍 五九〇

金泰元 五九〇

(ユ)

柚谷彌助 一八

俞箕煥 五三、五八

(メ)

目賀田種太郎 一四、一四、一八〇、一八一、一八三、一八五、一八六、一八七、一八八

(シ)

神功皇后 二五

釋玄蘇 二七

釋惟政 三〇

釋承光 三二

ビンハム 五五二、五六三

関泳翊 五七〇

関台鎬 五七三

関泳穆 五七四

(モ)

森泰次郎 八〇

森山茂 九四、一〇一、一〇二、一一一、一一九

森有禮 五三七、五三八、五四二、五四四

モルレンドルフ 五六〇、五六三

(セ)

全應善 一八〇

(ス)

崇禮 八一

スタンレー 四七五

辛啓榮 一四

シエフェルド 五三

申 一三八

邵友濂 三九、三〇、三三、三五、三六、三七、三八、三九、三五、三七、三〇、三六

ジヨナサン、ゴープル 四六、四七

ジエームス、ゴルドンベネット 四七五

シヤーマン 四七

ジヨウヂ、エル、ホウキー 四八

ジヨン、マリネール 五八

徐相雨 五八

(ヒ)

廣津弘信 一〇一、一〇二、一〇九、一一一、一一三、一一四

廣瀬直行 一五

関泳綺 一五、一七

関永煥 一五

ビスマーク 二七

平井希昌 四七



昭和十一年十月八日印刷  
昭和十一年十月十二日發行

(非賣品)



雜纂其四

不許複製

校訂者

平塚

篤

發行者

平塚

篤

印刷者

河合

勝夫

東京市杉並區西荻窪三丁目六十六番地

東京市本所區鹿橋一丁目廿七番地

出版印刷株式會社本所分工場

東京市麴町區內幸町大阪ビル內

發行所

秘書類纂刊行會

電話銀座(57)五五八九番  
振替東京三一六六四番



THE UNIVERSITY OF CHICAGO  
CHICAGO, ILLINOIS

1911	1912	1913	1914	1915
...	...	...	...	...

...







